

高知県内の万葉歌碑・奈半利

南 寿宏

県内の万葉歌碑は、次のとおり。

①安芸郡東洋町野根 ②安芸郡奈半利町乙横町 ③長岡郡大豊町栗生

今回は①東洋町の歌碑を紹介した。今回は、②奈半利町の歌碑の紹介である。

②安芸郡奈半利町乙横町

縄乃浦尔	塩焼火氣	夕去者	行過不得而	山尔棚引	万葉集 卷三 354 日置少老
縄の浦に	塩焼くけぶり	夕されば	行き過ぎかねて	山にたなびく	
なはのうらに	しほやくけぶり	ゆふされば	ゆきすぎかねて	やまにたなびく	
縄の浦に	塩を焼く煙は	夕方になっても	消えもせずに	山にたなびいているよ	

奈半利町 万葉集歌碑

後述するが、この歌の舞台が奈半利町であることは否定されている。しかし、奈半利町は、土佐日記に登場する。紀貫之は 905 年に古今和歌集を選んだが、晩年の 930 年、土佐守として土佐に赴任した。当時貫之は、60 台か。

かく行き暮らして、(奈半の)泊にいたりて、翁人ひとり、専女ひとり、あるがなかに心地悪しみして、物もものし給はで、ひそまりぬ。十日、けふは、この奈半の泊にとまりぬ。土佐日記

(九日の早朝、大湊を出港、)その日の暮れ、やっと奈半の泊に着いた。爺さん 1 人、女 1 人、疲れて気分がすぐれないというので、じっとした。そして結局、今日(十日)も奈半の泊でとまった。

934 年、任を終えた貫之は京を目指す。大湊を舟で出発し、京を目指したのだが、かつての部下たちが岸边をずっと追いかけてくる。すると貫之はすぐ舟を岸边に寄せて歓談・宴会。大湊では潮待ちのためか、十日間も停泊したという。この間、毎晩宴会が開かれたであろうことは、容易に想像できよう。『土佐のお客文化』は、当時から健在であった。

物部川を過ぎ、やっと部下が帰っていく。一行は奈半の泊をめざす。大湊は、現在の南国市大湊と思われるが、香南市夜須町手結という説もある。

引用文中の翁人は老貫之を連想させるが、貫之は土佐日記を女の視点から書いているので、貫之＝専女かも知れない。

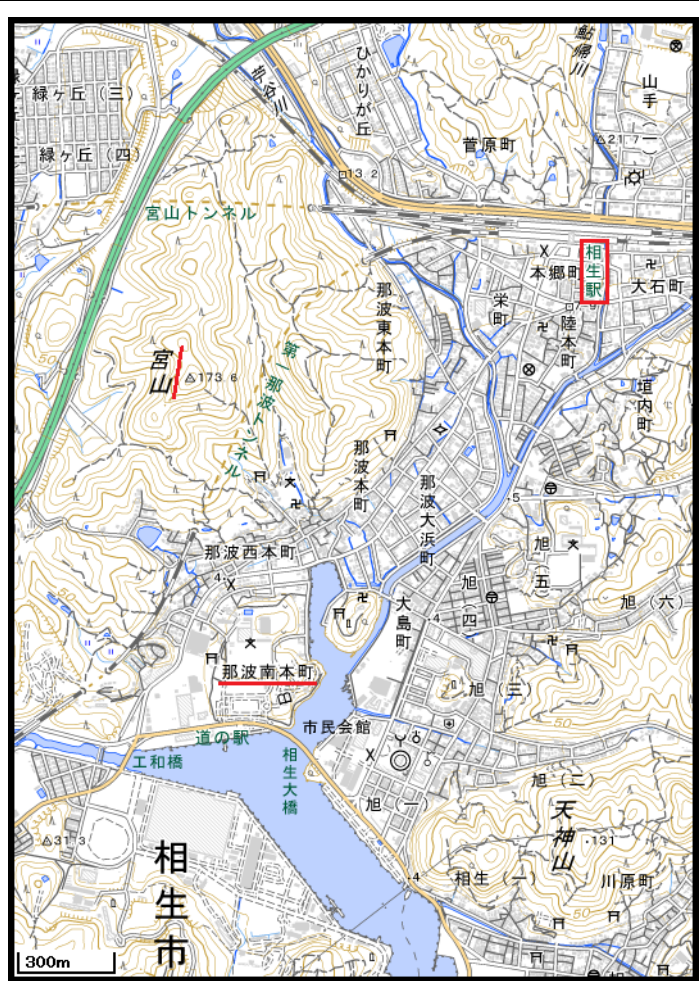
をどこもすなるにきといふものを、そんなもしてみむとてするなり。

二つの助動詞『なり』の違いを説明せよ。正解は後ページで。受験古語の定番ですな。

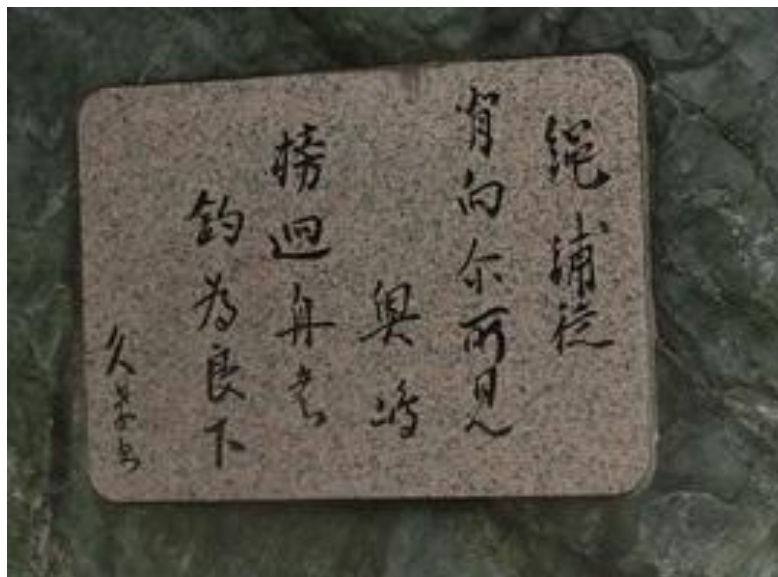
本歌の舞台である「なはのうら」については、赤穂郡説・飾磨説・摂津説・土佐説等があった。万葉集原文の「繩」を「奈半利」に同定するのは、かなり無理と思われる。実際この歌の地は、国語学者山田孝雄により、赤穂郡説が定説として確立した。山田孝雄とは、「国学の伝統に連なる最後の国学者」と云われる人で、山田文法の提唱者でもある。なお、有名な新解さん(三省堂「新明解国語辞典」)の編者は山田忠雄氏で別人。

山田孝雄は、「山陽本線那波駅のある地」と赤穂郡説を支持した。那波駅は昭和 17 年(1942 年)の相生市制施行により、相生駅に改称された。駅の西にある宮山は那波の地名が存在、また、同地には古墳群が確認されており、そこが塩焼きの地だったかも知れない。

右地形図の範囲外になるが、同地には万葉の岬という名所があり、山部赤人の縄の浦の歌碑がある。同地の歌碑は、著名な万葉学者である澤瀉久孝(おもだかひさたか 1890-1968)の著書の原稿から採字されたものというが、おそろしく達筆。



相生市那波周辺の地形図
国土地理院 HP による



相生市万葉の岬 万葉歌碑

縄浦従	背向尔所見	奥嶋	榜廻舟者	釣為良下	万葉集 卷三 357 山部赤人
縄の浦ゆ	背向に見ゆる	沖つ島	漕ぎ廻る舟は	釣しすらしも	
なはのうらゆ	そがひにみゆる	おきつしま	こぎみるふねは	つりしすらしも	
縄の浦の	後ろに見える	沖津島	漕いで回る舟は	釣りをしているらしいなあ	

奈半利町には、亜炭を挟在する唐ノ浜層群六本松層がある。同地については、本会報第 41 号に報告記事があるので、それを引用する。唐ノ浜には、唐浜という表記もある。

④ 奈半利駅10：46着 ポイント2 森林鉄道廃線跡/六本松層亜炭

奈半利は会員の J H 氏の生まれ故郷ということで、氏から当時の奈半利の様子を聞きつつ歩いていくと、駅から数分で、魚梁瀬森林鉄道の廃線跡に到達します。しばらくの間、かつての森林鉄道を心に浮かべ、ご堪能ください。

私が数年前にこの道を初めて通ったとき、思わず「おおおおおおっ」と叫んでしまいました。



森林鉄道跡のハイライト

法恩寺跨線橋

廃線跡の終点付近で道を北に転じ、数百m進むと、山腹に3つの筋を伴う崖が遠望できます。この筋が亜炭ですが、今回は時間の関係で、直接露頭に向かいます。

安芸市から室戸市にかけての海岸には、新生代新第三紀鮮新世の地層が分布しており、化石を多産します。この地層のグループを唐浜層群といい、穴内層、登層および六本松層に分かれます。

穴内層は砂岩層で、大型二枚貝化石を産します。

登層は泥岩層で、魚の耳石やサメの歯を産します。

六本松層は陸成層で、亜炭を挟みます。

この亜炭、まがりなりにも石炭なので燃えるはずなのですが、参加者は全員非喫煙者、誰もライターを持っておらず、その場で燃焼実験はできませんでした。でも、会員の A T さんが若気の至りを懺悔しているので、そちらをご覧ください。

<http://blog.livedoor.jp/azuritemeteorite/archives/6879831.html>

よい子のみんな、まねしちゃダメだよ。

なお、この亜炭、よく見ると、金粉のようなものが付着しています。これは、本物の金ではなく、パイライト(pyrite)。日本語では黄鉄鉱と呼ばれています。化学組成は FeS_2 で、酸素が乏しい場所で形成される鉱物です。このことから、この亜炭は、木本の遺体が堆積後、速やかに泥に埋まって、炭化してできたものであると、推測されます。酸素が多ければ、パイライトはもちろん、亜炭もきっとできなかったでしょうね。

唐ノ浜層群(トウノハマソウゲン)

(1) 層序と岩相

唐ノ浜層群は、高知県南東部室戸半島の西部に分布し、全層厚 300m に達する海成堆積物である。唐ノ浜層群は、一般に、登層、六本松層、穴内層の3つのユニットからなるとされる。ただし、それらの層序学的関係については、小規模な岩体がい範囲にわたって散点的に分布する唐ノ浜層群の特徴もあり、見解の一致をみていない。

(中略)

六本松層は、当初、奈半利層として記載されたが、基盤を構成する奈半利川層との混乱を避けるために甲藤ほか(1961)によって改称された。Uchio(1967)や Matsubara(2004)は、こうした改称を認めていないが、Kurihara(1968)、須鎗(1991c)、岩井ほか(2006)など、多くの研究で六本松の名称が採用されている。ここでは、便宜的にこの名称を採用する。この六本松層は、高知県安芸郡奈半利町六本松を模式地とし、同地のほか、奈半利町の車瀬や加茂、安芸郡田野町の日野、高田、大野台、安芸市穴内、室戸市羽根に分布する最大層厚 100m 以上の地層である。その岩相は礫岩を主体とし、泥岩、砂岩、あるいは褐炭を挟在する。

(中略)

(2) 化石

(中略)

六本松層からは海域環境を示唆する化石は見つかっていないが、褐炭層から *Abies*、*Alnus*、*Pinus* ならびにスギ科やイネ科植物のほか、*Fagus*、*Ulmus*、*Liquidamber* といった花粉化石が見ついている。

(中略)

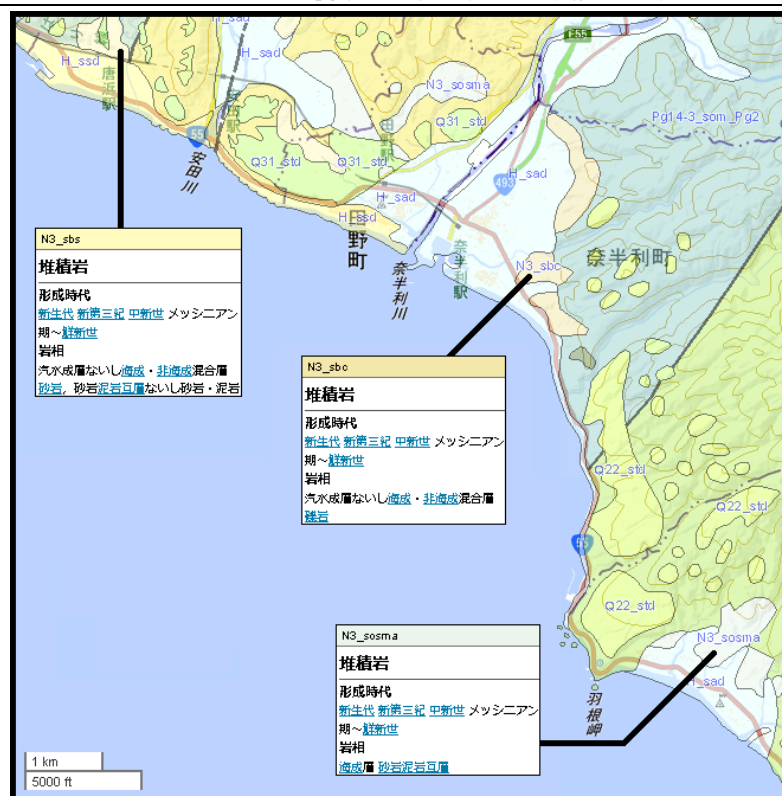
(3) 堆積環境

登層の堆積環境は、暖流の影響下にある陸棚斜面上部から陸棚縁辺と考えられている。六本松層は、その岩相や産出化石から、陸域の堆積物と考えられている。また、底生有孔虫化石からみた穴内層の堆積環境は、東方に深海化するとされ、その分布の西部域(伊尾木、穴内)では内側陸棚程度であるが、東部域(唐ノ浜、千福など)では外側陸棚に達するとされている。この穴内層に発達する堆積サイクルは、海進-海退のサイクルを示し、ミランコビッチサイクルに応答して形成された堆積シーケンスに相当すると解釈されている。

(4) 最近の研究

唐ノ浜層群は、年代決定に有効な有孔虫、放散虫、珪藻、石灰質ナノプランクトンといった浮遊性微化石が産出することに加え、岩相上も明瞭な堆積サイクルが知られることから、軌道要素年代を確立する上できわめて有効な地質体である。このことから、唐ノ浜層群では高知大学を中心とした研究グループによって、コア試料を用いた連続地質資料の解析が試みられてきた。最近では、IUGS によって 2009 年に提唱された新たな新第三紀と第四紀との境界を含むことも判明し、新第三紀から第四紀にかけての気候システムへの移行過程をよく記録していることが期待され、特に注目されている。

[奈良正和, 日本地方地質誌7 四国地方 日本地質学会編集 朝倉書店]



唐ノ浜層群地質図(産総研シームレス地質図を編集)